

「感謝の心を持つ」

コロサイ 3 : 15

堀田修一 21・12・26

- I 「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい」：15。主の教会で、人が人を支配する事がないように祈りたい。強い人から支配される事もないように祈りたい。「人間の奴隷となっただけではいけません」（I コリント 7 : 23）。そうならない為に「キリストの平和、キリストご自身が、私達の心を支配して下さるように」いつも祈りましょう。人にではなく主に結びつく時、人の支配は去る。主を間に置く交わりは幸い。愛を持って聞く事と真実を語る事のバランスのある主にある交わりは幸い。
- II 「そのために、あなたがたも召されて一つのからだとなったのです」：15。主を信じると、「私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだ（キリストのからだ）となりました」（I コリント 12 : 13）。使徒信条「公同の教会を信ず」。
- III 「感謝の心を持つ人になりなさい」：15。詩篇 103 : 2 で「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」とある。
1. 自分に語り掛ける。「わがたましいよ」。深い御言葉。多くの試練、苦しみの中で、主の恵みを忘れ主の恵みが見えなくなり易い。だから私達は、自分自身に語りかけ励ます。「主をほめたたえよう。試練、苦しみはあるが、今日までの主の恵みを数えて感謝しよう！試練の中でも、主は恵みを与えてくださる！」と。主の良くしてくださった事、恵みを「何一つ忘れるな」。私達の弱点を見抜かれた御言葉。私達は、人のした悪は忘れず根に持ち、主の恵みと人がしてくれた良い事は忘れ易い。不平不満は、自然に出て来るが、感謝は、自分にこの御言葉を語り掛け、意識して、主の恵みを数える事が大切。ノートに記す事は、大きな恵み！※私の小さな実践の恵みの証し。「祈れないほど忙しい？」の著者も。
- ※主の恵みを思い出し、数え、記して見ましょう。この礼拝の後も、この一年の主の恵みを数え、記していただきたい。あふれる恵みに気付かされる。今、試練があっても、主にある喜びと感謝が生まれる。※私が天に召された後、堀田牧師の説教には、「もったいない恵みへの感謝の大切さ」が中心にあったと言われるなら嬉しいです。
2. 103 : 3 からの主の恵みで、最初に記されているものは、何？ここに深い意味が！「主は、あなたのすべての咎を赦し」：3。主の十字架の血で私達のすべての咎、罪が赦されて、素晴らしい神との関係の回復、神と永遠に交われる恵み（＝永遠の命）こそが、最高の奇蹟的な恵みです！
3. 感謝の敵とそれに対処する素晴らしい御言葉。
- ①人と比べ、自分にないものを数え、ねたんでしまう→対処：自分にないものではなく、神から与えられているものを数え、感謝し、それらを神が望まれる事の為に喜んで用いる。「金銭を

愛する生活をしてはいけません。いま持っているもの(神から与えられているもの)で満足(感謝)しなさい。主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない』ヘブ13:5「その賜物を用いて互いに仕え」Iペテロ4:10

②実は、私達は、すべての数えきれないほどの多くのものを神からいただいているが、それらを「当然、当たり前」の心でとらえ、感謝の心がなくなってしまう→対処:「あなたがたは、何か、もらったものでないものがあるのですか」Iコリ4:7。私達は、裸で生まれてきた。命も、体も、今与えられている物、能力、霊的な豊かな恵み、すべては神が恵んで下さったもの。当然、当たりの心、態度を本日、悔い改めたい。神は、その真実な悔い改めを喜ばれる。※「選ばれてここに立つ」佐藤彰師著の紹介。P43~「上げすぎた『幸せのハードル』。今このような経験(大震災の為、自宅、教会堂に戻れず、着替え、お金もなく出発した流浪の旅)をしてみて思うことは、かつて…物はあるけれど、「あれがない、これがない」と考えていました。「隣の家にはあれがあるのにうちにはない」「あっちの家はああなのに我が家はこうだ」などと考えて来ました。でもそれはもうやめましょう。周りをキョロキョロ見回すのはやめましょう。戦後、みんなで「幸せのハードル」を上げ過ぎて来たのだと思うのです。震災で、私達のハードルはいきなりゼロまで下がりました。…シャワーを浴びて感激…暖かい食べ物をいただいた時も…涙…布団に寝かせてもらって、本当に感激…子どもたちがお古のランドセルをいただきました。…子どもたちは嬉しそうに帰って来ていつまでもランドセルをしょったまま…お古でも幸せなんだね」※佐藤師の証しを聞いた時の思い。教会が与えられている事の感謝。祈り支えて下さる方々、礼拝できる会堂他、数えきれない恵みが与えられている事を当たり前ではないと自覚し深く感謝したい。何一つ、当然ではない。牧会者がいない教会、ゼロから開拓で集う信徒の方がいない教会、会堂がない教会、色々な所を通っておられる教会、深い悩みの中にある人々がおられる。恵みは当然でないと自覚し祈りたい。

③満足度のハードルを上げてしまう→対処:御言葉の教えに、自分の満足度を合わせる。欲張らず、基準を下げる。地震やコロナ禍の中で学ぶ心。「満ち足りる心(一つ一つを心から感謝する心)を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また、何一つ持つて出ることできません。衣食があれば、それで満足すべきです」Iテモテ6:6-8。

④人への要求のハードルが、高過ぎる。そうすると、いつも心に怒り(要求)、さばきが起こり、いらいらしてしまう。→対処:人への要求のハードルを下げる。まず、その人の現状、等身大を受け入れる。人は受け入れられて初めて、変えられて行くプロセスが始まる。神は、私達を、そのままで、まず受け入れて下さる。そして、主の姿に一步一步、変え続けて下さる。「さばいてはいけません(まず受け入れる事をせず、自分の高過ぎる要求で人を責めてはならない)。さばかれないためです」マタイ7:1。

⑤自分の思い、視点で、感謝とそうでないものを簡単に分けてしまう心→対処:苦しみにも、主にあって尊い価値がある事を学び、知り続ける。「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし、今は、あなたのことばを守ります」「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれでああなたのおきてを学びました」詩119:67、71。苦しみは、自分の弱さを教え、神に心から拠り頼むことを教える。苦しみは、苦しんでいる人を思いやる

者、寄り添う者に変える。※すべてが理解できなくても。イザヤ55：6－9。苦しみから学んだ事を記してみましよう。

IV 神の恵みを数える感謝から生まれるもの。

1. まず、罪深い私達を愛して下さった神への愛、感謝が増し加わる。神に、心が近づく。
2. 主が愛しておられる教会、兄弟姉妹、家族、知人への愛、感謝の心が与えられる。受けた愛を思い家族、友人、知人にも感謝を示したい。常に「感謝の心」をいただきつつ感謝を言葉で伝えたい。なくして分かる、有り難さ。突然、天に召された方に感謝を伝えたかったと思う。時があるうちに感謝を！「震災を通して、当たり前のように明日があると思っていた思いが打ち砕かれました。明日があるか分からない。大切な人に、明日があると思わないで今日、大事な言葉を言いましよう」（佐藤彰師）。神と人に「感謝します」と。当教会の方々との出会いを感謝！いつかは分からないが、主の再臨の時、自分が天に召される時、隣人が生涯を終える時が一日一日近づいている。教会の方々の祈りの支えに感謝！
3. 神ご自身を喜び、神のあふれる恵みを数え感謝する時、試練の中でも、私達に喜びが与えられ、そこから律法主義からではない、心から主を証しする伝道、宣教が生まれる！「しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は神なる主を避け所とし、あなたの手すべてのみわざを語り告げましよう」詩73：28。神と恵みを喜ぶ幸せから宣教、伝道が生まれる！